九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

親族名称(「兄弟姉妹語」)の虚構的用法にまつわる日・韓コードスウィッチング

李, 宥定

https://doi.org/10.15017/1543669

出版情報：地球社会統合科学研究. 3, pp.1-6, 2015-09-25. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：

『地球社会統合科学研究』3号 1～6
Integrated Sciences for Global Society Studies
No.3，pp. 1～6

親族名称（「兄弟姉妹語」）の虚構的用法にまつわる日・韓コードスウィッチング

李（イ）　宥定（ユ ジョン）

1．はじめに

社会呼称の選択においては、年齢、親疎関係、社会的上下関係、性別など様々な要因が関わっており、言語によって優先される要因が異なる。例えば、韓国語では年齢が重要な要因として挙げられているのに対し、日本語では社会的上下関係が重要な要因として挙げられており、話し手より社会的地位が高ければ、いくら年齢が低く、親しい仲だとしても待遇表現と呼称に注意がはらわれる（유 2009）。ところが、親族名称の使用においては両言語とも虚構的用法（fictive use）の使用例が見られる場合がある。

(1) J（日本語母語話者、食堂で）：
お姉ちゃん、コーヒー早く頼むよ。　（유 2009：25）
(2) K（韓国語母語話者、母語場面、KAKAOTALKから）：
언니 추석 잘 보내다 가세요？
【訳：姉さんお盆は楽しく過ごせましたか】

これらは親族内（血縁関係）における呼称が親族外（非血縁関係）にまで拡張された例と言えようが、驚くことに日・韓コードスウィッチング（以下、日・韓CSと略す）の中にも、「兄弟姉妹語」に関する親族名称の虚構的用法の使用例が確認できた。例（3）は、日本語を母語とする韓国語学習者（Japanese-speaking learners of Korean 以下、JLと略す）と韓国語を母語とする日本語学習者（Korean-speaking learners of Japanese 以下、KLと略す）との携帯メールのやり取り（接触場面）で観察された事例で、例（4）はKL同士の母語場面における自然談話で観察された事例である。どちらも親族名称、中でも「兄弟姉妹語」の虚構的用法の使用が観察される。

(3)（接触場面、LINEから）

	JLM1：누나【姉さん】～!!僕はずっと糸島にいますよ！地震は寝てて気がつきませんでした 下関は大丈夫ですか？？

(4)（母語場面、自然談話から）

発話文番号	話者	発話内容
88	KLF1	언니고 大丈夫? 【姉さんこそ 大丈夫?】

しかし、自称詞・対称詞を含む呼称に関する日・韓対照研究はこれまで数多く研究されてきたものの、例（3）と例（4）のような日・韓CSにおける親族名称の虚構的用法に関するものは殆ど報告されておらず、その解明が求められている。したがって本研究では日・韓CSに見られる親族名称の虚構的用法の実態とそれが用いられる理由について実際の言語データを基に調査分析を行う。以下、第２節では先行研究を概観し、第３節では調査方法について述べる。そして第４節では、分析の結果とそれに基づいた考察を行い、最後に第５節で結論を述べる。

2．先行研究

親族名称の虚構的用法は日本語と韓国語のどちらにもみられるが、林（2001）は日本社会より韓国社会での方が広範囲にわたって用いられていると報告している。例えば、年上の人に対して「苗字＋さん」や「肩書き」などで呼ぶのが一般的である日本語では、「お姉さん」と「お兄さん」のような親族名称を用いるのは相手が子供の場合であると述べている（林 2001：115）。

一方で、韓国語では学校の先輩、親しい上司、近所の年上の仲間などには兄にあたる「오빠／형【兄】」、姉にあたる「언니／누나【姉】」、そして「名前＋親族名称」を用いる習慣がある。〈表1〉は、유（2009）が韓国のあるドラマの脚本（「겨울연가・冬のソナタ」「아름다운날들・美しき日々」）と同脚本の日本語対訳版を対象に、親族名称の家族内使用と家族外使用（親族名称の虚構的用法）を調査したものであるが、ここでも親族名称の虚構的用法をめぐる両国の相違が窺える。유（2009）によれば、韓国人は年上の人に対して親族名称の虚構的用法を使用する傾向があり、非血縁関係の年上の人に対する親族名称の使用は韓国特有のものであると指摘し、〈表1〉のと

おりに女性を中心とした親族名称の虚構的用法が特に目立つと述べている。

〈表１〉親族名称の使用実態

親族名称	男性		女性	
	家族内使用	家族外使用（虚構的用法）	家族内使用	家族外使用（虚構的用法）
韓国語	191	42	149	148
	233		297	
日本語	203	48	143	41
	251		184	

（유2009より筆者まとめ）

このような現象については、林（2001）の「擬制親族意識」からすると、非血縁関係にも関わらず、あえて親族名称を用いることは、架空の家族構成員という新たな社会的関係を構築し、関係を保とうとするために話し手が用いる一つのコミュニケーション戦略であると考えられる。以上のことから、日本語と韓国語のどちらにも親族名称の虚構的用法はみられるが、その適用範囲と使用頻度においては相違があることがわかった。

以上のことに基づき、日本語を母語とする韓国語学習者と韓国語を母語とする日本語学習者による日・韓CSには親族名称の虚構的用法に関してどのような特徴がみられるのかを調査する。

3. 調査方法と協力者

本研究では、日・韓CSにおける親族名称の虚構的用法の使用実態と使用理由について調べるため、JLとKLによる日・韓CSを分析の対象とする。日・韓CSに関するデータは、調査協力者と筆者が交わした自然談話の録音データ、「携帯メール（LINE、タイムライン含む）（KAKAOTALK、カカオストリ含む）」、通話の録音データと韓国釜山外国語大学に在学中の学生ら（留学生含む）から提供してもらった「携帯メール」、「FACEBOOK」の書き込み、聞き取った会話の書留を対象とする。総勢30名（韓国語母語話者13名、日本語母語話者17名）から得たこれらのデータは、母語場面（JLからJLへ、あるいはKLからKLへ）と接触場面（JLからKLへ、あるいはKLからJLへ）全てを対象としたものである。（KLF－韓国語を母語とする日本語学習者・女、KLM－韓国語を母語とする日本語学習者・男、JLF－日本語を母語とする韓国語学習者・女、JLM－日本語を母語とする韓国語学習者・男）

〈表２〉調査協力者のプロフィール

番号	協力者	年齢	番号	協力者	年齢	番号	協力者	年齢
1	KLF1	20代	11	KLM11	20代	21	JLF8	20代
2	KLF2	20代	12	KLF12	20代	22	JLF9	20代
3	KLF3	40代	13	KLF13	20代	23	JLF10	20代
4	KLF4	20代	14	JLM1	20代	24	JLF11	20代
5	KLF5	20代	15	JLM2	40代	25	JLF12	20代
6	KLF6	20代	16	JLF3	50代	26	JLF13	20代
7	KLM7	30代	17	JLF4	50代	27	JLF14	20代
8	KLF8	30代	18	JLF5	60代	28	JLF15	20代
9	KLF9	20代	19	JLF6	30代	29	JLF16	20代
10	KLF10	20代	20	JLF7	20代	30	JLF17	20代

4. 実態分析及び考察

4. 1　日･韓CSにおける親族名称の虚構的使用の実態

まず、KLによる親族名称の虚構的用法の使用実態から見てみたい。中西（2005）は、KL同士の携帯メールにおける日・韓CSでは、「～さん」「～くん」「～先輩」にあたる呼称が「兄さん」「姉さん」として現れていることを指摘した。今回の調査では、携帯メールのみならず、自然談話においても親族名称の虚構的用法が用いられていることを確認することができた。ただし「姉」にあたる親族名称に関して、韓国語の「언니【姉さん】」は用いても、日本語の「姉さん」を用いる例は発見できなかった。例（5）から例（6）を見れば、韓国語から日本語へとスウィッチが起きているが、「언니【姉さん】」の代わりに日本語の「姉さん」は用いられていないのが確認できる。

(5)（KL母語場面、自然談話から）

発話文番号	話者	発話内容
44	KLF6	언니と同じのメニューではない感じ。 【姉さんと同じのメニューではない感じ】

(6)（KL母語場面、KAKAOTALKから）

	KLF1：ありゃまあ…オンニ【姉さん】ファイト

一方、KLとJLの接触場面においては、次の例（7）と例(8)のように、韓国語の「언니【姉さん】」と日本語の「姉さん」による親族名称の虚構的な使用例が発見された。つまりKLの場合、母語場面においても接触場面においても女性を中心に親族名称の虚構的用法を使用しているのが観察できるものの、KL同士の母語場面では韓国語の親族名称に限られる傾向がある。

(7)（KLとJL接触場面、LINEから）

	KLF8：はい。姉さんが居てなんだか心強いです。

(8)（KLとJL接触場面、KLF9が聞き取った会話を書き留めたものから）

KLF9：언니 오키나와 너구리 강타했다는데 조심해요ㅜㅜ

【訳：姉さん、沖縄にノグリ（台風の名前）が接近しているそうですが、気を付けて】

次のJLの母語場面における親族名称の虚構的用法の使用は、相手が子供の場合や商売に関わる仕事をしている人など、その使用例が限られている。しかし、接触場面における親族名称の虚構的使用は頻繁に観察された。ただし、日本語の「姉さん」と「兄さん」のような親族名称は用いず、もっぱら韓国語の「언니【姉さん】」「오빠【兄さん】」のみを使っていた。無論、談話の相手が韓国語母語話者であるからであろうとの推測はつくものの、JLが目標言語の親族名称のみを使用していることは、KLがJLに対して両言語の親族名称を使用していたこととは対照的である。JLによる親族名称の虚構的用法の使用実態は以下のとおりである。表記については「ハングル表記」「カタカナハングル」「ひらがなハングル」「언니【姉さん】」「오빠【兄さん】」「名前＋親族名称」の形が観察できた。

(9)（KLとJL接触場面、KAKAOTALKから）

	JLF8：ナミおんに【ナミ姉さん】새해 복 많이 받으세요【あけましておめでとうございます】

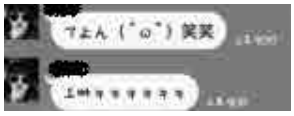
(10)（KLとJL接触場面、FACEBOOKから）

	JLF9：웅웅ㅋㅋㅋ괜찮아! 오빠스타일【んん、ククくいいよ！兄さんスタイル】

(11)（KLとJL接触場面、FACEBOOKから）

	JLF10：고마워요　언니【ありがとう姉さん】기쁘해요【うれしい】

(12)（KLとJL接触場面、KAKAOTALKから）

	JLF11：てよん（＾ｗ＾）笑笑 오빠ㅋㅋㅋㅋㅋㅋ【兄さんククククク】

(13)（KLとJL接触場面、KAKAOTALKから）

	JLF12：おんに【姉さん】はありますか？

(14)（KLとJL接触場面、KAKAOTALKから）

	JLF13：どやってみるの。関西弁って書いてあるｗ 오빠【兄さん】呑みすぎて日本語ちょっと変になってるよ

(15)（KLとJL接触場面、KAKAOTALKから）

	JLM1：ヌナ【姉さん】、学校にいますか？

(16)（KLとJL接触場面、KAKAOTALKから）

	JLF12：언니【姉さん】元気ですかぁ？

ここで、親族名称の虚構的使用に対するJLの意識が垣間見える例を紹介する。ここからは、JLが何語を使うのかにより親族名称の虚構的用法に対する意識の変化が窺える。例（17）は、韓国語で書いている部分では韓国語の「오빠【兄さん】」をもって親族名称を虚構的に使用しているのに対し、本人による日本語訳では「苗字＋～さん」を使用している。つまりJLは、韓国語会話においてあるいは韓国語母語話者に対しては韓国語の親族名称の虚構的用法に従う傾向がある。同一人物に対しても、日本語では「苗字＋さん」を、韓国語では「苗字＋오빠」を使用していることがその証拠である。

(17)（JLによるFACEBOOKから）

	JLF12：카와사키오빠랑 등산했음【かわさき兄さん登山】… JLF12：川崎さんと２人で登山…

以上、日・韓CSに見られる親族名称の虚構的用法について「年上の人に対する兄弟姉妹語の使用」を中心に見てみたが、年下の人に対する呼称における日・韓CSには、次のような特徴が観察できた。韓国語では、「名前＋아、야」「名前＋氏」の形が最も多く用いられているのに対し、日本語では「名前＋呼び捨て」「苗字＋呼び捨て」が最も親しみやすい表現だとされている（小林、1998）。ところが、接触場面ではKLがJLに対して日本語における呼び方の「名前＋呼び捨て」を用いている例が多く見られたのに対して、JLがKLに対しては韓国語における呼び方の「名前＋아、야」「名前＋氏」を用いている例が多く見られた。

（18）（KLからJLへ、LINEから）

	KLF12：げんき マユもげんき？

（19）（KLからJLへ、FACEBOOKから）

	KLF13：はるか！！うちも大好き！！！

（20）（JLからKLへ、LINEから）

	JLF3：유정씨【名前＋氏】덕분에 앞으로 이걸 들을 수가 없어요 【おかげでこれからは間違って使ったりしないでしょ】

（21）（JLからKLへ、FACEBOOKから）

	JLF6：유정아【名前＋아】 ～～～☆ そうなの！そっちは全然降らなかった？まだ雪が残っていて寒いですよ。

つまり、年上の人に対しては親族名称の虚構的用法を用いて関係を保とうとするが、年下の人に対しては、目標言語の呼び方に従い関係を保とうとする傾向がみられた。これらについては相手によって形が変えられてはいるものの、どちらも話し手が社会関係を進行させるために用いるコミュニケーション戦略としての呼称の機能であると考えられる。

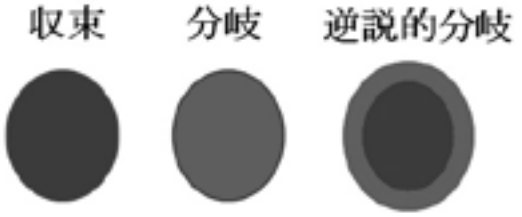
4．2　考察

日・韓CSにおける親族名称の虚構的用法の実態について分析を行った結果、KLは年上の人に対して、「擬制親族意識」を母語以外の言語にまで適用しようとする傾向があり、JLは韓国語の使用や会話の相手が韓国人の場合においてのみ親族呼称を虚構的に用い、親族呼称の虚構的用法を制限的に使用する傾向があることが確認できた。ところが、年下の人に対しては両集団とも目標言語のもつ呼び方を重視する。これらについては「収束（Convergence―話し手が自分の言語行動を相手のそれに近づけようとすること）」と「分岐（Divergence―話し手が自分の言語行動を相手と関係なく維持しようとするか、相手との差異を強調しようとすること）」で相手に対する自身の態度を示すアコモデーション理論（Accommodation Theory）から考えてみたい。

アコモデーション理論とは、話し手が聞き手と自分の関係をどう認知するかによって、自分の言語使用を相手に近づけたり、遠ざけたり、あるいは維持するという考え方である。また、第二言語習得においては学習者が自分の属する民族グループにどの程度強いアイデンティティを持っているか、第二言語の民族グループに対して自分の民族をどう位置付けているかといった意識が学習者の言語使用に影響を与えるとされている（高見澤 2004:216）。

調査の結果、JLはKLに対して積極的に「収束」の姿勢を示し、年上のKLにも、年下のKLにも同様の傾向を見せる。一方、KLは年下のJLに対しては「収束」の姿勢を示すが、年上のJLに対しては「呼称」の形態だけを見れば「分岐」の姿勢を崩さない。しかし、これは自分の言語行動を相手から遠ざけようとするのではなく、むしろ、積極的に話し手を自分の方へ引き入れようとしており、一般的な「分岐」とは異なる。筆者はこれを「逆説的分岐（Paradoxical Divergence）」とする。

〈図 1〉逆説的分岐



つまり、KLはJLに対して自分の言語行動を相手のそれに近づける「収束」より、相手の言語行動を自分のそれに引きつけ、形態的には「分岐」に近いが、実際には「収束」に近い「逆説的分岐」をもってコミュニケーションを図ろうとしているのである。

5．まとめ

本研究は日・韓CSにみられる親族名称の虚構的用法の使用実態とその原因について調査分析を行ったものである。KLとJLによる日・韓CSを対象に分析を行った結果、KLは年上の人に対して、「擬制親族意識」を母語以外の言語にまで適用しようとする傾向が見られた。一方、JLは韓国語の使用や会話の相手が韓国人の場合においてのみ親族呼称を虚構的に用いており、親族呼称の虚構的用法を制限的に使用する傾向があることが確認できた。しかし、年下の人に対しては、両集団とも目標言語のもつ呼び方を重視する。これらについて筆者はアコモデーション理論の「収束」と「分岐」、そして形態的には「分岐」に近いが、実際には「収束」に近い「逆説的分岐」をもって解明を試みた。

参考文献

小林美恵子（1998）「学校の呼称－女性教師の呼称「～クン」を中心に－」『日本語学』17（9）明治書院 pp.32-36.

田崎敦子（2006）「コード・スウィッチング研究の概観－多言語社会のコミュニケーション分析に向け－」『言語文化と日本語教育』増刊特集号 pp.56-82.

高見澤孟（2004）『新しく始まる日本語教育1』語文学社 pp.18-21.

高見澤孟（2004）『新しく始まる日本語教育基本用語事典』語文学社 pp.212-222.

中西久実子（2005）「日本語学習者の携帯メールにおけるカタカナ韓国語へのコードスイッチング」社会言語科学　第8巻第1号 pp.132-138.

林炫情（2001）「日本語と韓国語における呼称の対照研究序論」広島大学大学院国際協力研究科『国際協力研究誌』7-1 pp.107-121.

유혜민（2009）「한국어 일본어의 호칭 비교 분석-젠더와 대우도를 중심으로-」경희대학교일 어일문학과석사 학위논문 pp.1-67.

Gumperz, J.J.（1982）Conversational code-switching. In J.J. Gumperz（ed.）,*DiscourseStrategies.*Cambridge：University Press. pp.59.

Fictive use of Sibling Kinship Terms in Japanese-Korean Code-Switching

LEE, Yujeong
Kyushu University, doctoral course eujung0916@yahoo.co.jp

This study analyzes the use of fictive kinship terms in Japanese-Korean code-switching and its underlying causes. The participants of this study were divided into two groups: Japanese-speaking learners of Korean (JL) and Korean-speaking learners of Japanese (KL). When their conversation partner was older than them, the members of the KL group tended to try to estimate the age of the partner and then use a kinship term appropriate for that age, thus treating the partner as a family member even if he or she was not actually a relative. In the KL group, this kind of fictional kinship mentality was at work when the speakers wished to form a closer bond with another person and could be observed not only when they were speaking their native Korean, but also when they were using Japanese, a foreign language from their perspective. On the other hand, the JL group tended to use fictive kinship terms in a limited manner, only when speaking Korean or talking to a Korean person. However, when talking to someone younger than themselves, members of both groups gave priority to the manner of address typical to the target language. In the analysis of the results, the Accommodation Theory concepts of "convergence," "divergence" and "paradoxical divergence" were applied in cases where "paradoxical divergence" superficially resembles divergence, but is in fact closer to convergence.